

# What do you want to do in Hiroshima University?



マミッキー (09) タイトル。クリスマスさいいな? 俺を連れてって。



△けいこ (10) 演劇でござる。誰か見にこない?



△ミンチ (10) 土方だな。ちゃんと木曜日はきてるよ授業。



△あかり (10) ギター、あと読書。うん、最近生活不規則やねー。



△あいこ (10) 主婦。ケーキづくりとか家庭的なことに熱中してます。



△めり (10) ちびまる子ちゃんかな。今日の料理と車校かなあ。



△まゆ&ともちゃん (10) 駐車場とめさせて。



△よーすけ (10) 小説読むこと。吉本ばなな。



マとんこ (09) レポートを必死に。

マカーリー (10) 部活 (バドミントン) とサークル (アクリル水彩)



マまつきん&ほのか (10) 編み物とバドミントン。うん、バドミントン。



マフジモン (10) 部活。キャンブル。



△みつこ (07) 日本語教師になりたいなあ。前は部活頑張っていました。少林寺、チアガール募集中。



△のぶ (09) 只今、YMCAに入っております。プールにキャンプ!!

将軍 (09) 今、オリキャンと塾講師と走軍かな? 走軍きてね。





## 巻頭言……………1

「回り道もまたよし」 総合科学部長 江口 正晃

## 特集……………2

### 春憂鬱 隣は何をする人ぞ……………3

あなたは大学生活で何に重きを置いていますか？それともただ何となく過ごしているだけでしょうか？  
そんなあなたにこのページを捧げます。

## ハラスメントを考える……………9

## 研究室紹介……………12

シャピロ、ジェローム F. 研究室	木幡 藤子研究室
秋葉 節夫研究室	安二屋宗正研究室
吉田 清研究室	星野 公三研究室
小野寺真一研究室	和田 正信研究室

## エッセイ……………20

「病名」

難波 紘二（総合科学部生体行動科学コース教官）

「雑感：教養教育の社会学」

材木 和雄（総合科学部社会科学コース教官）

「現代きもの考」

中尾 和恵（社会科学研究科国際社会論専攻・比較文化研究D3）

「デカイ町での小さなトラブル」

甲田 政道（教務係事務官）

## 新任教官紹介……………26

平手 友彦（外国語コース・フランス語講座 助教授）

盧 濤（外国語コース・中国語講座 助教授）

清水 真木（地域文化コース・ヨーロッパ研究講座 講師）

## 人事異動のお知らせ……………27

人事異動

隊員募集広告

## 追悼文……………29

森 利一先生追悼文

菊池邦雄先生追悼文

## 本のお話……………31

人には生きていくうちに様々な出逢いがあると思う。

それは、人だったり、場所だったり、本だったり……？

## アンケート調査……………32

あなたは何か資格を持っていますか？

またはこれから取得しようとしていますか？

大学生がどの程度資格を取っているかを調べてみました。

## 読者からの声……………34

## 編集後記……………35

## 飛翔伝言板……………37

飛翔からの連絡です。みてくれるとうれしいな。





## 回り道もまたよし

総合科学部長 江口正晃



私が学生の頃といえども40年前になるが、当時の大学は教育や学生生活に対して、今ほど懇切丁寧な対応はしてくれなかった。それだけ自由で大人扱いされていたということもできる。当時は多くの家庭が子沢山で食料も少なく、家庭の中でさえ生存競争の激しかった子供時代を過ごして鍛えられていたからであろうか、大学生の自立性はそれほど問題にはならなかった。諸君は、これまでは受験のことだけしか頭になかったかもしれない。しかし今後は、社会に出て共同体の中で生活できるだけのモラルや判断力を持った大人への成長をはかることを望みたい。社会では通らないようなことを、認めてほしい、許容してほしいと言う学生が多い。学生だから大目に見よ、ということは通用しない。自らの行為には自分で責任を持たなくてはならない。

大学時代はその過ごし方次第で、卒業する頃にはきわめて大きな差ができる。自分の生きる方向性をできるだけ早く決めることができれば、学ぶべき学問の内容も主体的に選択することができよう。自分の進路をよく考えて入学してきた人たちには最も効率的な過ごし方であろう。

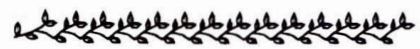
しかし入学以前に考えてきた将来設計にあまりこだわることもない。なぜなら、その将来設計はたぶん不十分な情報によることも多いだろう。入学後に得られる新しい知識や情報を参考に自らの進むべき道をじっくり模索して人生設計を行い、その上で必要な勉強を十分やってほしい。世の中は「貴方は何ができますか」と問う時代に変化し、また、人生において学生時代ほどまとまった勉強の機会二度とないといっても過言ではない。

中には回り道をする人もいるだろうが、それもまたよし。たとえ回り道をしたとしても決して無駄なものはなく、その回り道は足腰や精神を鍛え、いつか何かの折りに役に立つと私は信じている。ただ大学で何の目的もなく、だらだらと過ごすような学生には大学を退学して働くこと、親の保護から独立して自分で生きていくことを勧めたい。勉強しないで一定の到達点に届かない学生は卒業させるべきでないという明確な方針が、大学のあり方を審議している大学審議会にて提案されている。

広島大学大学教育研究センターが何年前に行ったアンケート調査では、大学時代にどんなに優秀であっても、教養や自分の考えがなく協調性も持ち合わせない人は社会ではうまく生きていけないと卒業していった先輩たちは述べている。学生時代に、人間としての幅を広げることや、自分の考えを持ち表現できる能力を身につけてほしい。勉学以外にも、クラブ活動、ボランティア、多読など学生時代にしかできないことも多い。これらを通じて社会性や、リーダーシップ、自己表現力などを育てることができるので、積極的に取り組むことを勧めたい。社会では、学んできたもの、いろいろな経験を総合させながら判断をし、試行錯誤を繰り返しつつ生きていくことになる。

皆さんの健闘を祈る。

# 特集の樹

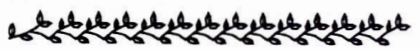


## 特集:春憂鬱~隣は何をする人ぞ~

大学生は何を考えて生活しているのでしょうか。ありがちけど的を射た下記のコラム群をご覧ください。お好きなページからどうぞ。

### コラムの森

- \* 勉強 . . . . . 3 ページ
- \* 資格/バイト . . . . . 4
- \* サークル/趣味 . . . . . 5
- \* さがし中 . . . . . 6
- \* インタビュー . . . . . 7、8



# 春憂鬱

～隣は何をする人ぞ～



大学時代には何をすべきなのだろうか。自分は今これを頑張っているけれど、本当にそれで良いのだろうか。周りの人達・・・特に自分とは違うことを頑張っている人達は、一体どんな考えを持って頑張っているのだろうか。自分のことも他人のことも近くなる・・・。誰でも一度くらいは、そんなことを考えて憂鬱な気分になったことがあるだろう。

そこで今回、そんな疑問に対し少しでも解決の糸口を見出すために、大学時代に打ち込む人が多いと思われる6つの項目に話題を絞って、それぞれに打ち込む人の意見を参考にしてみたい。今打ち込むことがある人もない人も、見知らぬ世界を垣間見てはいかがでしょうか。

## 大学の勉強に打ち込む人について

“大”学生生活”において私たちは、自らの興味に応じてサークル活動をしたり、

バイトに励んだりする。だが本来“大学”は勉強するための場所である。一口に勉強といっても、全ての教科をまんべんなくこなすことが要求された今までの受験勉強とは違う。自分のやりたいことを重視し、深めたかった分野を専門的に掘り下げていく。これが大学における勉強である。そのための環境が、大学において完全、とはいえないが整っているのは確かである。図書館、実験室、情報処理センターなどの施設の利用、文献の充実、そして何より専門家である教授の存在。同じ授業料を払って4年間過ごすのならこれらを最大限に利用すべきではないだろうか。学生の間は遊びたい、好きなことをやりたいと思っている人も多いだろうが、働き始めてから“勉強したい”と思っても、時間的にかなり束縛される。お金もかかる。

大学生活は社会に出る前の最後の自由時間かもしれない。それだけ時間があるときに勉強しないて他にいつ勉強するのか。

遊ぶことも、バイトもサークルも、勿論それぞれの生活を潤す大事な存在であろう。

しかし大学生である以上、社会が私たちにある程度の知識・学力を要求することを忘れてはならない。大学生だからこそ、勉強はおろそかにできないのである。

## 大学以外の勉強（資格取得など）に打ち込む人について

資格を取ろうとすることは素晴らしいことである。

なぜならば、第一に資格を取ろうとすることは自分の積極的な意思の表れに他ならないからだ。資格を取ろうとする人には何であれ理由がある。それは例えば、将来の仕事のためであったり、自分の能力の確認や向上のためであったりする。そのような理由や目標を持つことが、将来に不安を感じがちな大学生に対してある種の活力をもたらすと考えられる。

第二に資格を取る過程での勉強もまた自分にプラスになるからである。資格そのものを取るための勉強の他にもその資格の社会的位置づけを知ることまた勉強といえよう。そのような社会勉強的要素も大学生生活をより豊かにできるものである。

第三に現在の資格に対する社会評価の高さである。資格を持つことで就職時や会社内での評価を上げることができるであろう。

以上の理由から資格を取ることは、自分の内側からも外側からも素晴らしい勉強となり得るし、外からの評価へも繋がるものであると思われる。



## バイトに打ち込む人について

お金が欲しい、と思うのは、おそらく多くの人に共通の心理だろう。そんな、

一見世俗的な欲望から始まったひとつのバイトという活動から、実に様々なものを私たちは吸収している。他人と接する機会のあるバイトなら、他人とのうまいつきあい方や目上の人に対する礼儀も心得るようになる。新たな人との出会いで、今まで自分が見ていた世界とは違う世界が見えることもある。そして、いわゆる“社会”を知り、お金を稼ぐことの厳しさ、お金の大切さを身をもって実感し、自分で働いてお金を稼いだということに大きな喜びを感じるだろう。この喜びの感情は誰にとっても大切なもので、そこから自分に対する自信や自立心が芽生えることもある。

しかし、経済的に恵まれている学生に対しては、「今バイトをしなくても、養ってもらっている間は、学生時代でないとできない勉強や運動、遊びなどを優先してやればよい。」という人もいる。また、「社会を知るのには大学を卒業して就職した後でも十分だ。」という意見もある。しかし、経済的に恵まれている学生だからこそ、自分の力でお金を稼いで一円の重みを知る、というのも学生時代にやっておくべきことのひとつといえるのではないだろうか。

どんな活動も、本人次第で有意義なものにできる。バイトの場合もそうだ。労働の喜び、お金の大切さ、社会のしくみ、大学では学べない雑学、自分に対する自信、親からの自立心等々、多くのものを得ることができる。もちろん、肝心の目的であるお金も。自分が今何をやりたいのかわからなくなったとき、それを探すひとつの手段としてバイトをし、そ

こから新たな自分の世界を広げていくのもいいかもしれない。



### サークルに打ち込む人について

大学という4年間には人それぞれの過ごし方がある。その中で、サークルという

場で時を過ごす人は多い。なぜ多くの人がサークルに魅力を感じるのだろうか。

大学は自由なところだ。けれど人間関係がとても希薄になりやすい所でもある。一人一人に自由が許されている反面、全体としての一体感に欠けるのだ。高校までは、学校が用意したクラスという居場所があったが、大学生になると自分で自分の居場所を探さなくては行けない。そこで、サークルという場が求められるようになる。

サークルの最大の魅力はそこで育まれる人間関係にある。私達はサークルを通して多くの人々と出会い、交流を深める。そこでは友情が生まれ、愛が生まれるときもある。サークルという場において私達は生きていく上で欠かすことのできない他者との交流を行っているのだ。また、目標のあるサークルであれば目標に向けて努力することで、やりがいや連帯感を味わうこともできるだろう。さらに、サークルを運営することによっても得るものはある。多くの人をまとめるのは決して簡単ではないが、学ぶこともまた多い。それは他ではあまりできない

貴重な体験だ。このように私達はサークルという場において様々なことを経験し、

学ぶことができる。大学時代にサークルで過ごした思い出は、時が経っても

忘れたいものになるだろう。

### 趣味に打ち込む人について

人は様々な「趣味」と呼ばれるものを持っている。ある人は片手間に趣味を

楽しみ、またある人はその趣味に生活の中で最も重きを置いて打ち込んでいる。

趣味に打ち込む人というのは何を求めてそうしているのだろうか。まず最初に、ズバリ日常生活のウサ晴らしというのが理由として挙げられるだろう。現実を忘れたいがために一心に没頭する・・・消極的なようだが、それで雑雑した日常の中で自分を見失わないで生きていけるのなら、それも選択肢の一つではなかろうか。

また一方、もっと積極的に、自分とは何なのかを見極め、自分を見つけるためにやりたい事に打ち込む人もいるだろう。自分の想い描いていることを表現したり、他人の考えを自分の頭に詰め込んで整理したりすることは、自分を見つける第一歩だと私は思っている。そしてそれは、自分が今本当にやりたいことを通してこそ最も為され得るのではないだろうか。

自分に自信が持てるようになるために打ち込むという人もいるかもしれない。私は自分のやりたい事を精一杯やって、「私」という存在をフル活用している。そんな自信だ。たとえ、他人にはっきり示せる形での「モノ」が残らなくても、自分の中の満足感だけは確実に残る。うまくやれば、素質が磨かれて素晴らしいモノに結実するかもしれないという期待を抱くことだってできる。

以上のことから分かるとおり、趣味に没頭するのはとても大切なことだ。一生を通して

そうだし、また、この人格形成途上にあると言われる大学生活の中でそうする

事にも、何らかの意義があるのではないだろうか。

### さがし中の人について

「大学生生活で何に重きを置いているか？」という質問に、「何に重きを置いてよ

いかかわからない。」という回答も多い。大学生になれば、自由にできる時間が増える。もちろん勉強をするのも大切なのだが、それだけで終わってしまうのはあまりにももったいない。しかし、では実際何をすればよいかというとはわからない。

何をしてよいかかわからないのを、周りの環境のせいにして、無気力に過ごしては何もはじまらない。自分が本当にやりたいことや、自分に適していることを見つけることもできない。大学は、自ら行動を起こさなければ何も与えてはくれないのだ。

やりたいこと、必要なことがたくさんあって絞りきれないという場合もあろう。あれこれ手を出して、結局すべて中途半端になってしまうのは、将来を考えると不安である。しかし、人の一生を通してみれば、4年間を失敗したとしてもやり直しはきくとも考えられる。あれこれ考え、あれこれやってみる期間があってもよいのではないだろうか。

実りの多い4年間をすごせるか。それは、何か一つをやり通したか、いろいろやったか、にはかわからないのではないだろうか。現状で一つに重きを置けなければ、そういう自分に逆らわず、そのときそのとき、目先のことをがんばってみるのも悪くない。



以上、代表的な6つの意見を取り上げてみた。これらの意見は、肯定的な目だけで見たもので否定的な考え方もそれぞれにあるだろう。しかし、これらのことに重きを置いている人が、どのように考えてそのようにしているのか、ということについては分かっていただけではいかぬと思う。しかし、これらの意見はあくまで一般的な意見でしかない。そこで、実際に何かに打ち込んでいる人が考えていることを具体的に調べるためにインタビューを行い、次からの頁にまとめてみた。

## インタビュー

今回御協力いただいた方々

【この頁のインタビュー】

総合科学部2年生 女性

【次頁のインタビュー】

理学部2年生 男性 (右の写真も)



まず私達は、ついこの間まで、いくつかのサークルによって構成されるサークル団体の役員を務めていらっしゃった方にお話を聞いてみました。

なぜ、役員に？

1年生の時、友人に誘われて今入っているサークルに入ったんですけど、その流れで立候補とかじゃなくて、先輩の指名・・・つまり成り行きによって役員になってしまいました。

の任期は？

1年の11月から2年の11月まででした。ついこの間終わったばかりです。

のどんな感じでしたか？

最初は自分の本来のサークルとの両立が困難で、大変なことばかりでした。でも2月頃、新入生に配るパンフレットの編集という、形の残る仕事をしたことで、だんだん楽しくなってきました。忙しすぎる苦痛はまだあったんですけど、充実してくるようになったんです。

の何か学んだことは？

いろんな事を学びました。共同作業では自分と他人とは価値観が違うということを中心に理解しなければいけないのだということ。人間関係のかけひきの仕方。自分がどこまでできるのか、の限界を何となくつかむこともできました。

の収穫はありましたか？

ありました。自分を見つめ直すきっかけを得ることができましたし、これだけの事をやったのだという自信が持てるようになりました。他にもいろいろ得るものがありました。経験は財産です。もし役員の仕事をしていなかったら、これだけのことを学べたかどうか分かりません。

のもし今、もう一度やるかと言われたら？

今はもう忙しすぎるんで断りますけど、もし忙しさとかの状況が1年の11月と同じだったら、やると思います。大変さより、得たものの方が大きかったですから。

のありがとうございました。

(取材日：1998年12月16日)

次に私達は、絵を描くことを趣味にしている方にお話を聞いてみました。

のなぜ、絵を？

絵が好きだからです。描くだけでなく観るのも好きです。自分の絵を見て人が喜ぶ顔を見るのも好きです。

の絵を描くことの魅力は何ですか？

自分を見つめることができる。色使いで自分を表現することもできる。心も豊かになっていきます。俺は嘘つきだけど、絵は嘘をつきません。

のどのくらいのペースで絵を描いていますか？

日曜日とかに何枚も描いてます。一番描きやすいのはナチュラル・ハイになる夜中。1枚あたり大体1〜2時間くらいかかります。30分くらいで描きあげるときもあるんですけど、手をつける前に描く対象を探したり、頭の中で構図とかをグニャグニャ考えたりするのにすごく時間をかけています。

の絵を描きはじめてきっかけは？

初めて絵を描いたのは保育園の時。うまく描いて、誉められて、それから好きになりました。ちゃんとした絵の描き方は習っていません。習いたいけどお金と時間がないもので・・・。

のコンテストとかには作品を出してないんですか？

出してません・・・そういうのが見つからないんで。美術館とかに行けばいろいろ分かるのかも知れないけど、そこまで足を運んでないんです。

の描きたくなくなる時ってありますか？

集中できない時や、描こうと思ってもうまく描けない時。自分の技術のなさに「ああ・・・」と思うこともあります。

の将来に向けては？

色の勉強をしてグラフィックとかの仕事につく気はありません。60代でこの趣味を復活させて、孫に絵を描いてあげたいです。孫が「あ、おじいちゃんが絵を描いてるー。」と言ったら「昔はわしも・・・。」とかいって話をしてみたいです。

の何か一言お願いします。

一筆に命(たましい)を！

のありがとうございました。

(取材日：1998年12月18日)

.....以上.....まとめて代えて.....

ここにあげたのはあくまで主なものだけだが、参考にしていただけただろうか。大学生活における憂鬱は、ちょっとした心の持ちようでもどうにかなるものだ。人にはそれぞれ違った価値観が存在するのだから、周りに異をとらわれず、些細なことでも自分が何をすべきか、自分に何ができるのかを、自分なりに考えてみるのもいいだろう。生活の中で何かに重きを置き、そこに目的を定めて過ごすのはきっと楽しいはずだ。



## ハラスメントを考える

～アカハラ、ハラスメント(アカハラ)～

### はじめに

平成11年4月から、広島大学において、ハラスメント防止に関する規定及び細則が発効される予定である。これは、総合科学部に限らず、広島大学に籍を置く人間がいわれなき差別や冷遇を受けることがないように、また万が一問題が起こった場合に大学がしかるべき行動を取れるように制定されたものである。飛翔では、これを機会に、大学におけるハラスメントについて考えてみることにした。

大学におけるハラスメントについて調べているうちに、「アカハラ」という言葉にたどり着いた。

アカハラとは何か。この言葉の生みの親である上野千鶴子さんによると、これは「アカデミック・セクシュアル・ハラスメント」の略で、大学内で発生する性的いやがらせを指す。しかし、「アカデミック」な場で起きるのは、セクシュアルな問題だけではないはずだ。様々な問題が大学では起こりうる。そしてそれらは、大学内で起こることによってより複雑化し、深刻化する。

被害が大学内で起こった場合であっても、被害現場である大学を離れることは被害者にとって、学問の場から離れるという大きな不利益につながる。そのため、問題から離れることができず、被害が深刻化しやすい。また、大学の自治性の高さから問題が表面化しにくく、被害者が援助を受けにくい状況にあるという指摘もされている。このような性質は、セクシュアルな問題のみに見られるものではないだろう。以上のことをふまえて、アカハラを飛翔編集委員は次のように定義してみた。

**アカハラとは:**  
「大学内で発生するいやがらせ」であり、前述のように大学という環境の特殊性から、一般に複雑化、深刻化しやすい。

このアカハラ問題の存在を認識することは、学生にとって重要だろう。何故ならば、学生は問題の被害者となりやすいだけでなく、自分では意識しないうちに加害者にもなりうるからである(例えば、異性や留学生に対して、知らず差別的な言動を取っていることはないだろうか?)。被害の深刻さを考える時、こういった問題について無関心であることは、危険なことではないだろうか。

もっとも、言葉をむやみに拡大解釈して「あれもアカハラ、これもアカハラ」では取捨がつかないし、弊害も大きいだろう。このことについては、もっと慎重な議論が必要と思われるので、飛翔でも今後、教官と学生とを交えた座談会などを通して問題を正確に把握していきたいと考えている。

文責: 飛翔編集部

※前述の、ハラスメント防止に関する規定及び細則の制定に尽力された佐藤先生に、学生に向けたメッセージを載せました。

### 総合科学部の学生諸君へ

佐藤 正樹(人間文化コース)



広島大学におけるハラスメント防止のための規定作成にふとした偶然から参画することになった者の一人として、求めに応じ総合科学部の学生諸君にあてて小文をしたためる。

世にはいわれのない疎外、排斥、あるいは冷遇、差別があり、それどころか威嚇や迫害さえ決してめずらしくないのは周知の事実であり、自由な学問の場として、そのようなものともっとも無縁であるはずの大学でさえ、かならずしもそれらをまぬかれていないこともまた悲しむべき事実である。

学生諸君もわたしたち教師も、ひとしく学問を志し、この総合科学部をその場所として選択した者であるが、およそその人自身の生きかたと無縁な学問など信じるに値しないとすれば、ともに学問の道を歩む者として、諸君がそうであるように、わたしたちも諸君を個人として尊重し、その人格をかけがえのないものとして重んずる。その意味で、立場を越えて平等があまねく行われねばならないのは当然のことである。

本誌が諸君の手に届けられるころには、いわゆるハラスメントを防止するための幹になる規定と、それを支える複数の細則などが発効し、あらたな仕組が整っているであろう。それは戒めとなるべきものであるが、それ以上に、いわれのない疎外、差別、冷遇をわたしたち自身の手でわたしたちの大学から追放する真摯な決意の表明でもある。

学問研究に携わる者は、また同時におのが過ちを改めるのにもっともすみやかでなければならぬ。そもそもそのような精神が「学」と「問」の本質の一部をなすからである。それは、ひとの世に好悪、愛憎が切り離せないものであり、その誘惑がいたるところに隠れてはいても、その誘惑に屈した者はただちにその非を認め、過ちを改めなければならないということをも意味するであろう。他方、いわれなき差別の苦渋をなめた者もその屈辱に甘んずることなく、個人として、傷ついた人権を回復する権利を有し、また、そのための仕組も用意されるはずである。

しかし、傷ついた者はいっしょに弱くも強い者である。人権の回復という当然の権利を行使する勇氣はややもすると萎えてしまうであろう。もしもそういう友人のすがたに接したならば、すすんで手を差し伸べる心ばえを示してほしい。

ゲーテは、だれしも愛するひとからしか学ばないと言った。愛するとは言わないまでも、学ぼうするためには、その前提として信頼関係がなければならぬまい。新しい規定の発効は真摯な決意の表明であると書いたが、それはまた大学の全構成員のあいだに信頼関係を築き、はぐくむことの意味表明であり、かつまたそれを傷つけまいとする願いの発露でもあり、過ちを正し、個人を尊重することを胸に刻むよすがともなるべきものである。

新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。これからの大学生活を思い、胸弾む毎日をご過ごされていることと思います。しかし一方で、私たちの周りには様々な問題が存在するの事実です。そこで、今回飛翔ではそのような問題の一つであるセクハラについて、学生相談室の岩村先生に記事を書いていただきました。

## セクハラで困ったら

学生相談室 岩村 聡

セクハラなどで困っている人が援助を求めてきたら、できるだけ力になりたいと思う。

とりわけ、被害の悪影響から立ち直って自由な生活を取り戻すことには、大いに協力したいし、実際協力できることは少なくないと思う。

私が援助した被害者の1人は、「加害者」の影におびえ、大学に登校できなくなり、単位が取れなくなっていたが、たまっていたこわさや怒りを吐き出しつたりするにつれて、徐々に元を取り戻すようになった。

セクハラなどの被害者は、「あなた自身(も)非があったのではないか」と責められたり、自責の念に駆られたりすることが少なくない。が、あなたが耐えられないような行き過ぎた行動の責任は、その行動をした人にある。話を聞いて、「あなたは悪くない」と言ってあげることが多い。

セクハラなどの被害者は、事件の説明を求められるとき、思い出したくない恥ずかしいできごとを話させられて、かえって被害を深刻化してしまう場合がある。被害者の立ち直りを助けるためには、「事実」の詳細を確かめることを急ぐ必要がない場合がある。私達は、「いま話したいことから話して、まだ話したくないことは話さなくてもよい」という姿勢で、相談に乗ることが多い。来談者が同性のカウンセラーを選ぶこともできる。

このようなセクハラなどの相談が学生相談室に持ち込まれることは、まだ少ないが、以前と比べると、少しずつ増えてきた印象を持つ。

ここ数年、カウンセラー仲間の援助報告などを読む機会も増えてきた。被害者が陥りやすい後遺症やそれに対する援助のコツや、「加害者」がかかえている問題点やその克服への援助方法について勉強する機会も増えてきた。そうこうしているうちに、実際に被害を受けた人の相談に乗る経験もした。逆に友人の1人が法に触れるような事件を起こして、相談に乗る経験もあった。

現に進行中の被害にストップをかけるためには、関係学部長や担当委員会などと相談して、対応を求める必要があるだろう。そのようなケースはまだ経験していないが、一定の役割は果たせると思う。また、再発防止のため、注意を促す情報を学内にフィードバックする役割も、はたしたいと思う。(近々「広大フォーラム」に、より具体的な報告を計画している。)

その一方で私達カウンセラーは、「加害者」を罰したりすることに関しては、協力に限界がある場合もあるだろう。私達には、「加害者」に対しても、罰することよりも、更生を援助する役割が向いている。「加害者」が、同じ職場の同僚であったりしたら、なおさらである。

しかしそれにしても、これまでの社会には、男性には多少のことは許されるし、女性は多少のことは我慢すべきだという考えがあったと思う。男性の1人である私も、過去に反省すべきことがなかったとはいえない。そのような社会は、協力し合って変えて行かないといけないと思う。

シヤピロ、ジェローム P.研究室

人間文化コース 講師  
(A427)



### 《研究内容》

簡単に言ってしまうと  
「learning about culture from the cinema」  
ということになる。

例えば原爆について学ぼうとするとき、当然のことながら日本とアメリカではその反応が異なる。人々はそれを理解するために、原爆に関する本を読んだり誰かにそのことについて尋ねたりする。それと同様に映画を見ることによっても、原爆に対する認識の違いや原爆の効果を研究することができる。

### Shapiro's saying

現在の学生は非常に能力があるのにそれを発揮しきれてないと思う。問題は彼らにではなく、日本の教育システムにあるのだが。



(取材:青松伴晃)

研究室紹介



## 木幡藤子研究室

地域文化コース 教授 (A620)



### 略歴

大分市で生まれ、高校卒業まで関西に住み、大学と大学院のときは東京で過ごしました。その後10年ほどドイツに留学し、帰国後3年間関西の4大学の5学部で非常勤講師をしました。広島大学に来たのは9年前のことになります。今まで1カ所にあまり長く滞在することの無かった私ですが、今いるこの場所の居心地は悪くありませんでした。

### 研究内容

古代イスラエルの考古学、歴史、言語学、古代オリエントの神話や法、文学をかじりながら、旧約聖書の文献学をしています。つまり、旧約聖書の各書がどのような過程を経て成立したのか、そしてその各段階においてどのような思想を読み取ることができるかを問う学問です。

今やっている仕事の一つは聖書の翻訳で、出エジプト記と民数記を受け持っています。これはただの翻訳ではなく、歴史的背景などについての注釈が書ける面白い仕事です。

最近では、ある文書の著者の女性観というテーマにも取り組んでいます。聖書の研究は、何年やっても新しい事が見えてきて、興味は尽きません。他にも現代の聖書学は伝統的な聖書研究とどう違うかという問題にも興味があります。

聖書学を専門にする人はめったにいませんので、聖書学で卒論を書いた学生さんはまだいません。ただキリスト教に関わるテーマで卒論を書く学生さんのお手伝いをすることはたびたびあります。

### 研究を始めたきっかけ

家庭や学校で(ミッション系でしたので)聖書の話は聞いていましたが、大学1年の時、聖書の言葉が生き生きと語りかけてくるという経験をし、クリスチャンになりました。そして、聖書を原語で読めたらよいと思い、当時、国際基督教大学の外国語関係の学科にいたのですが、1年生のうちに人文科学科に移りました。それから、次第に聖書にはまっていき、今に至っています。でも信仰と研究は違います。

### 趣味

バッハの音楽を聴くこと、お料理やお菓子づくりが好きでした。今年は和菓子作りを始めました。また、エッセイや他分野の本を読むのも好きです。意外なところで聖書やキリスト教との関わりを見つかることがあります。

(取材：古川、飯寺)

## 秋葉節夫研究室

社会科学コース 教授 (A712)



中央、手前が先生

### 研究内容

#### 1 社会構造論、社会階層(階級)論

欧米の文献を通して社会構造を理論的に把握する。その他、国家間のポータレス化について。

#### 2 地域社会学、農村社会学

地域の生活問題、住民意識の有様、地域の環境問題について。

### 研究室の雰囲気

現在3年生2人、4年生1人、院生1人という**所帯**です。(所帯というのは、家庭的な雰囲気があるから。)私はコーヒーをいれるのが好きで、コーヒーをいれるのは私、片づけは学生、というように**役割分担**ができています。

### 総科生に一言

総科は専門にとらわれずに自分のやりたいことをできるので、「総合」はやりたいことが決まっていなければできません。だから、自分の専門を早いうちから決めておくべきです。

### 先生の趣味

スキー 年に3、4回、子どもをつれていきます。最近は子供にスキーを教えるという**パパぶり**を発揮しています。

旅行 社会学の性格上、よく旅行に行きます。数年前は学生を連れて県内や岡山に研究旅行に行っていました。研究を行いつつ、その地域の文化を味わえるという**趣味と研究の一致**に幸福を感じています。

(取材：石川、伊藤、森岡)

## 安仁屋宗正研究室

外国語コース 助教授 (A305)



**\*先生の専門は何でしょうか。\***  
「理論言語学」です。一口に理論言語学といっても音、単語、意味など、様々な分野での研究がありますが、統語論、つまり文レベルでの構文の分析をしています。主に英語について研究しています。

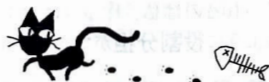
**\*統語論を始めたきっかけは？\***  
実は学生の頃は英文学を専攻していました。しかし、アメリカに留学の際、諸事情により言語学を専攻してしまいました。英文学はとて難しい科目なのです。



**\*留学経験について聞かせて下さい。\***  
留学のきっかけは大学の先生に「行けばどうにかなるから行って来い」と勧められたからでした。初めは2年のつもりが、カリフォルニア州立大学修士課程で約5年、ワシントン大学博士課程で約5年、計10年間留学していました。ワシントン州立大学でスケアー先生(総合科学部 外国語コース I群)と知り合いになったんですよ。

**\*留学中のエピソードが何かあれば教えてください。\***  
いろいろありました。お金が無くて、電気・電話を止められて、ふかしたジャガイモをルームメイトと食べたこともありました。いろんな人と友達になれました。韓国人や台湾人……。メキシコで現地の人と間違われたこともあります。

**\*お薦めの本などありましたら教えてください。\***  
『Zen in English Literature and Oriental Classics』(禅と英文学)/R.H.ブライス/  
北星堂書店・・・がお勧めです。



**\*最後に、学生に一言お願いします。\***  
遊んだ方がいい。つまり、やりたいことをやった方がいい。自分の学生時代も友人とよく朝まで飲み歩いたりしたけど、その仲間とは今でも友達で集まってパーティーなんかをしています。

**\*取材を終えて\***  
快く取材に応じて下さり、談笑のうち終えることができました。話しやすくてあたたかい雰囲気でした。  
(取材者: 松田、吉田)



## 吉田 精研究室

数理情報科学コース 教授 (C815)



### 研究内容

- ・過去
  - ・変分理論 (最小作用の原理)  
例: 光が水の中で屈折するのは、エネルギーが最小になるように進むから。
  - ・生物集団の行動パターンの数学的研究
  - ・波動の原理 (先生の学位論文だそうです。)
- ・現在  
生物モデルの数学的研究。(粘菌が胞子をつくるために動き回る動きのメカニズムを数学的に研究している。)

やっている研究について

- \*きっかけ  
他の人がやっているのをみておもしろかったから。
- \*その研究の魅力  
研究されていないタイプの微分方程式ができておもしろい

**趣味**  
計算機で遊ぶこと  
水泳

**学生に望むこと**  
楽しくやって下さい



**取材の感想**  
楽しそうに話して下さい、私も楽しかった。

(取材: 古川恵里)





## 和田正信研究室

生体行動科学コース 助教授  
(A107)



左から二人目が先生

### < 研究領域 >

#### ・運動生理生化学

骨格筋の運動・トレーニングによる変化で、一過性の運動による筋疲労の変化を研究している。例えばラットを使用して運動（ハムスターがクルクルまわるあの道具を使用）後の骨格筋を取り出し、筋疲労の度合いを調べる。

### < 卒業生の論文 >

#### ・筋細胞内グルタチオン濃度の低下が筋小胞体の機能に及ぼす影響

筋疲労は筋肉の酸化により引き起こるという説があり、それならば初めから筋肉を酸化していれば、何もせずとも筋疲労の状態となるのではないかということ調べている。

#### ・ラットヒラメ筋の後肢宙づりに伴う組織科学的・生化学的变化

ラットを用いて無重力状態に近い状態、後肢宙づり（しっぽを吊す）の状態ですばらしい期間生活したもので実験している。

### < 先生の趣味 >

体を動かすのが好きで、陸上部のスタッフとして一緒にランニングなどを行っています。

またスキー実習にも参加しています。

それ以外にも囲碁を楽しんでいるが、周りに誰もできる人がいないためなかなか対局ができないそうです。

### < 研究室の学生に聞いてみました >

#### ・研究室の雰囲気は？

とてもいい感じです。院生や教官も親切で、「助け合い」という感じがします。

#### ・和田先生はどんな人ですか？

指導教官のだけど、非常につきあいやすい。よく話しかけてくれ、親近感があります。

### < 取材を終えて >

和田先生は非常に人当たりがよく、忙しい中でも快く取材に応じて下さいました。

研究室内は至る所に「PUFFY」が貼ってあってとても和やかな雰囲気でした。

(取材：前田和寛)

## 病名

難波敏二 (生体行動科学コース 教授)

高熱と痙攣と嘔吐にさいなまれていたその幼児は、主治医の懸命の手当の甲斐もなく、病名のつかないまま、短かった一生を終えた。幸い両親が承諾してくれて、病理解剖を行うことができた。

全身の臓器は肉眼的にはやや腫大しているだけで、出血や壊死などの目立った変化はなかった。しかし主な臓器から組織を切り出して作製した顕微鏡標本では、細胞内に多数の小さな脂肪滴が充満していた。それは脳、肝臓、腎臓の細胞に特に著明であった。

このような病変は見たこともなかったもので、いろいろと文献を調べ、「ライ症候群」というのがそれに近いと分かり、そのように主治医に報告書を送った。主治医はそれで死亡診断書を発行した。

終わったと思ったが、実はそれが発端だった。この病名が子供を失った母親のある種の情熱に火をつけてしまったのだ。はじめ近所の小児科医で風邪だといわれて安心していたのに、あれよあれよという間に容態が急変し、救急で病院に転送され、死んで解剖されたあげく、妙な病名をつけられた。(実際これは素人にはライ病と間違われはしまいか、と報告書を書くときにふと思った) 娘を哀惜する追悼の本を自費出版するとともに薬害だと騒ぎだした。投薬中のアスピリンが原因だというのである。提訴したが医院の投薬にも病院の治療にもアスピリンは使われていなかった。訴訟は原告の敗訴になった。

しかし新聞で騒がれたので医院は患者が減り、主治医は転勤になり、医療機関も被害を受けた。

負けた母親はそれから大学に入りなおし、法律の勉強を始めた。大学ではセミナーの海外旅行で指導教官が学生の旅費をピンハネしていると学部長に投書した。疑われたその教

官は信用を失った。やがて学部を卒業し大学院に進んだ。また何年かしてその人が近畿地方のある大学の講師として採用されたという新聞記事を読んだ。たぶん医療過誤と患者の権利をテーマに今も研究を続けているだろう。

ライ症候群というのはオーストラリアのライという医師が60年代に報告した小児の病名である。風邪様の症状に始まり、子供は発熱、痙攣、嘔吐などの激しい症状を起こし、急激に死に至る。肝臓を中心に全身の臓器に脂肪化が起きるが、原因は今も不明である。戦前から昭和30年代まで、日本に多発した「疫痢」という致死性の小児病とほとんど同じものだとは後で知った。

あのとき解剖をしていなかったら、あるいは「疫痢」という病名をつけていたら、その後どうなっていただろうと、19年後の今でも思う。

